Story1

居世（こせ）神社にまつわる伝説

国道沿いにある鳥居をくぐり階段を上ると、
木々に囲まれた社が静かにたたずんでいます。
居世神社は垂水の中でも格式が高く、
古くから上世家の方々が代々守ってきました。
昭和四十八年（１９７３）に神社改築が行われ、
現在の形になりました。
建立の年代等ははっきりしませんが、
欽明天皇と安徳天皇にまつわる物語が残っています。

欽明天皇第一皇子と居世神社

居世神社の祭神に関してのもっとも古い記録によると、上古（年代不詳）十二月二十九日の夜、居世神の門（かど）に住む農夫が海岸に行ったところ、幼児の泣き声がしました。不思議に思って火を照らして見に行ったところ、渚に舟が漂流し、中に七歳の童子が乗っていました。これが欽明天皇第一皇子であったといわれています。

皇子は、はだしで雪の降る庭に出るなど、行いに軽々しいところがあったため、帝位を継ぐことはできないと船に乗せられて流されたといいます。農夫は皇子を大事に育て、妻にも皇子を会わせず、人に見られるのを極度に嫌い、用心しました。そのため、居世神集落の山の嶺に「法師の立つ手」という見張りをしていた場所が今でも残っています。皇子はわずか十三歳で没したといわれています。皇子のご潜居の地は、神社から東へ三百五十メートルほどの地で農夫の住まいでした。居世神社と天皇とのかかわりを示すとされる菊の御紋が、境内の柱や梁に今も残されています。

しかしながら、欽明天皇第一皇子の漂着の説については、様々な考察がされており、伝承の中では十二月二十九日とありますが、欽明時代は暦法が伝わっておらず、あったとしても民間にはないと考えられること、皇子は日本書紀によると箭球大兄皇子（やだたまのおおえのみこ）といい、十三歳でなくなっていますが、皇子が雪中を裸足で走られたくらいで船に乗せて流すとは考えにくく、また、おもり役もいるはずなのについていないなど、深い疑問と謎が残っています。